

瀬崎林業

ベトナム産合板・LVL事業を強化

「顧客目線の仕入れ力」生かす

瀬崎林業(大阪市、遠野嘉之社長)は、ベトナム産梱包用合板・LVLの事業を強化する。

中国国内の環境規制の強化や、人件費や木材の原木、関税の高騰などで中国資本がベトナムに工場を移す動きが加速しているが、ベトナム産製品の品質はここ数年で著しく改善している。日本の厳しい要求にきめ細かく対応する柔軟性があり、価格も中国産より安価なため、木質梱包材で

は、最も注目される資材となっている。同社がベトナム産梱包材の取り扱いを開始したのは2019年と後発だったが、わずか5年で販売数量を大きく伸ばした。

直営事業を行う同社は、産地メーカー顧客と直でつながるパイプにより、顧客の要望を産地メーカーに伝え、需要が望む製品を届けることができる。直質のため、コスト面でも優位だ。

現在ベトナムでは14

の生産工場と契約しているが、契約工場数を増やしていく。常時、現地に足を運び、日本が求める品質や要望に対応できる工場を厳選



東海倉庫内のベトナム産LVL

している。樹種はスタイラック、ス、アカシア、ユーカリ、バインなど。生産工程ごとに品質をアレンジ、グレード分けで

顧客の要望に対応できるため、顧客の要望にきめ細かな製品ラインナップをそろえている。ホットプレスの回数を増やして接着を剥がれにくくする。単板をサンディングして接着能力を向上させる。接着剤のグレードを要望の価格帯に合わせる。といった対応を行う。

遠野社長は「種別機械などの輸出が増えて梱包が小型化し、LVLを使用する木箱が増えていて、LVLは元々乾燥している単板を積層、圧着しているため、屋内で濡れなければ力づくで、形状変化を起さず、評価もされが長所。評価もされこれからも伸びるだろう」と話す。

同社は国内倉庫を関東、名古屋、大阪、九州に計9カ所保有し、特注品からレギュラー品まで、各サイズを取りそろえる。短納期で出荷できることも強みとなっている。